

播磨の駅路・駅家と古代寺院（前）

寺 岡 洋



日本古代の駅伝制度 — 駅路・駅家・伝路

播磨の古代寺院の紹介を続けていますが、今回は古代寺院ではなく、寺院の選地と密接に関連する古代の道路である、駅路（えきろ）と駅家（うまや・えきか）、伝路（でんろ）を取上げます。“〇〇駅伝”の起源は1300年前に遡る？

江戸時代までの通信手段は文書や口頭によるが、いずれにしても人が動くしかない。7世紀後半、日本列島の大部分を版図にする古代国家が成立し、統一国家を維持するための様々な装置が整備され、そのひとつが駅路と駅家である。烽（烽火）もあったが、情報量が限られる。

列島は七道（7地域）に編成され、道幅12mの計画的な直線道が造られる。古代道路は天皇を頂点とする古代国家の実態を可視的に見せる役割をも持ち、古代寺院もその一端を担う存在であった。七道はいまもって健在で、山陽道、西海道（九州）、山陰道、東海道、東山道、北陸道、南海道（淡路・四国）になる。このうち、山陽道・西海道の一部（大宰府まで）は「大路」と呼ばれ、古代のメインロードであった。

高速の交通手段として馬の利用があり、駅家は馬の乗換え、文書の送達、宿泊、酒食の提供など多様な業務を担っていた。

播磨国と阪神間（摂津国）はいうまでもなく山陽道になる。駅家の数は時期により変遷があり、『延喜式』（えんぎしき 律令の施行細則 927年）編纂時には、全国七道の駅数は402。播磨には9ヶ所（山陽道本路7ヶ所、美作支路2ヶ所）、阪神間には2ヶ所存在した。

瓦葺・白壁・朱塗りの駅館 ― 迎賓館だった

山陽道（大路）の駅家は際立つ特徴がある。当時、寺院以外に見ることがなかった基壇の上に瓦葺き・白壁・朱塗りの建物が建つ（山陽道では国府も掘立柱建物だったようだ？）。蕃客（新羅使・渤海使）の接待に備え、頑張って「瓦葺粉壁」の駅家を駅路に建て並べたのである。

駅は、原則30里（約16km）毎に設置される。駅馬は、大路廿疋、中路十疋、小路五疋。

摂津国（阪神間）の駅家

■葦屋（あしや）駅家 — 芦屋廃寺あり

駅家の中心施設である駅館院（やっかんいん）の遺構がまだ検出されないが、芦屋川西岸の深江北町遺跡（神戸市東灘区）・津知遺跡（芦屋市）周辺と確定している。山麓には芦屋廃寺が建つ。

深江北町遺跡（第9次）調査では、「驛」（上図）と書かれた墨書土器が10点余り出土し、さらに、「掠人（くらひと）」と記された木簡が出土した。

駅家の運営に渡来系氏族である「葦屋棕人」がいたことが明らかになった。芦屋川流域～住吉川流域一帯は、東漢（やまとのあや）氏の同族（葦屋漢人）が居住するミヤケが想定できる。

■ 須磨駅家

まだ確定しないが、妙法寺川左岸（ＪＲ山陽線鷹取駅・鷹取工場の北側）の大田町遺跡（神戸市須磨区大田町）が有力な候補地である。西方の行幸町遺跡・天神町遺跡などと共に、ミヤケが置かれていた地ではないかと考えられる。

播磨の駅家リスト 9駅 → 7駅へ

明石	確定地なし	明石城の東方か？
* 邑美	長坂寺遺跡	明石市魚住町長坂寺
賀古	古大内遺跡	加古川市野口町古大内
* 佐突	北宿遺跡	姫路市別所町佐土・北宿
草上	今宿丁田遺跡	姫路市東今宿付近
大市	太市中遺跡	姫路市太市中向山付近
布勢	小犬丸遺跡	たつの市揖西町小犬丸
高田	辻ケ内遺跡	赤穂郡上郡町佐用谷？
野磨	落地遺跡	赤穂郡上郡町八反坪・飯坂

大同二年（807）の「太政官符」では、「播磨国 九驛」とあるが、「延喜式・兵部省諸国駅伝馬（えきてんま）」条では7駅に減っている。削減された2駅（*印）のうち1ヶ所は、記録が残り「佐突（さつち）駅家」であり、もう1ヶ所は駅名不詳で、「呂美（おうみ）駅家」と仮称されている。

■明石駅家 — 海峡を望む駅楼、太寺廃寺



明石駅家は所在地不詳だが、上図周辺が推定地。斜めの線が山陽道海浜ルート想定図、●印が太寺廃寺、初期郡家も周辺に想定されている。

須磨駅から明石駅までのルートが確定していないことが駅家の位置に関連し、海岸沿いのルートを採用すれば台地の裾に、白川峠を越え伊川（いかわ）沿いコースならば台地上に駅家が想定される。

明石郡で唯一の古代寺院である太寺（たいでら）廃寺は台地上にあり、駅家の周辺に立地する。

JR山陽線明石駅で明石城（北）側に出て堀端を明石市立文化博物館へ歩き、さらに少し東に歩けば少々殺風景な明石神社（上ノ丸遺跡）が鎮座する。この神社の前身は山王神社で、「摩耶神社」とも呼ばれており、南の坂は「真湯坂」。地誌には「摩耶谷」も記され、明石神社が載る台地一帯が「摩耶」と呼ばれていたと推測されている。マヤはウマヤの転訛とされる（ウマヤ→マヤ）。

須磨駅家を大田町遺跡、明石駅家を明石神社の南辺とすると、その間の距離は海浜コースでおよそ14km、山越えコースなら17.5km。

『播磨国風土記』逸文には、「明石駅家、駒手御井」が記される。丘陵裾に立地する月照寺（明石市上丸町）の「亀の水」では今も湧水が流れ、ポリ缶を持った人が訪れている。中西廃寺（印南郡）でも見られるように丘陵裾には名水が湧く。

菅原道真は讃岐国守在任中（888年）、明石駅家で「**駅楼**の壁に題す」という詩を残している。「駅楼」と言える楼閣の建物が存在した。

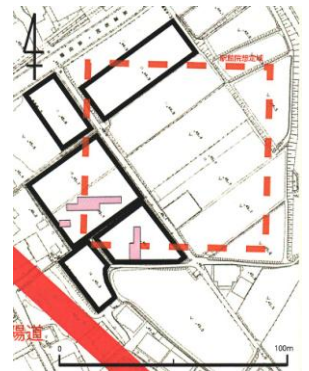
道真は887年、河陽（かよう）駅（山崎駅）でも「駅楼」を詩に残している。「……故人、王府君**駅楼**に手を執り……」。王府君の墓が駅家か、目の届くところにあり、府君と尊称でよばれていることから、渡来系の駅長、詩人だったのかもしれない。山崎駅（大山崎町）は南に淀川、明石駅は明石海峡に臨み、詩興を催すのであろうか。

■邑美駅家（長坂寺遺跡）

JR山陽線大久保駅から土山駅の間、国道2号線の北側を古代山陽道の想定ラインでもある近世西国街道が並走し、邑美駅家跡の真横を通る（右図の赤線）。

明石駅家跡から邑美駅家まで約10km。JR魚住駅から北へ、1km余りの緩やかな登りを歩けば印南野台地の南東端、「大堂（大道）池と呼ぶ半月形の溜池に抱かれた西側の台地にある」。標高45m前後、現状は水田。水田の畦畔・農道が駅家の名残でもある。

長坂寺（ちょうはんじ）遺跡は戦前から瓦の出土により廃寺跡とされていたが、歴史地理の研究が進み文献に名前の残らない逸名の駅家跡であることが明らかになった。仮称の「邑美」は古代に実在する地名で、風土記には大海里（おうみのさと）があり、聖武天皇は印南野（いなみの）の邑美頓宮（おうみのかりみや）に行幸しており、万葉集にも詠まれる。和名抄には「明石郡邑美郷」。



兵庫県立考古博物館により調査され、

- i) 一辺80m四方、正方位の方形区画（駅館院）が想定され、この規模は賀古・布勢・野磨など播磨国内で調査された他の駅家と同規模
 - ii) 他の駅家と共通する瓦が出土する
 - iii) 出土土器は8世紀中頃の須恵器で、7世紀や9世紀に前後する遺物はない
 - iv) 山陽道に隣接する立地
- などから、駅家跡であることがほぼ確定した。

さらに、正方位をとる瓦葺駅家の下層に、山陽道の軸線と平行する掘立柱建物が検出され、駅家には新旧2時期あることが予想された。

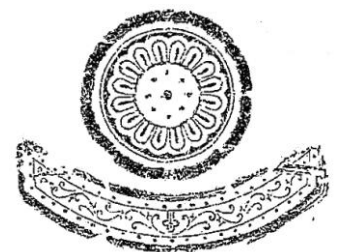
邑美頓宮（行宮）は 邑美駅家だった？

聖武天皇は即位2年目の神亀三年（726）、印南野と難波宮に行幸している。

9月27日、行幸のための

臨時の官である装束司（しよ

うそくし）や造頓宮司（そうとんぐうし）が任命され、10月7日には平城京を出発し、10日に邑美頓宮に到着。19日には難波宮へ移っている（『続日本紀』）。



「長坂寺式軒瓦」

印南野での行宮（あんぐう）所在地は不明だが、行幸までの準備期間が極めて短いことから行宮は準備されていたのであろう。印南野で最も大規模に整備された施設といえば山陽道の駅家であり、邑美駅家を行宮として使用した可能性が高い。

前記の「山崎駅（河陽駅）」は嵯峨天皇がしばしば行宮として利用し、「河陽（かやの）離宮」として整備され、さらに山城国府に転用されている。

赤根川河口の魚住泊（船瀬）から印南野、奥山廃寺（飛鳥）の瓦や四天王寺の鴟尾（しび）を焼いた高丘古窯跡群一帯は、蘇我氏が主導して設置した吉備のミヤケの中継拠点として同時期に設置されたミヤケが存在した、と考えられる。

■賀古駅家（古大内遺跡）― 野口廃寺

“日本最大の駅家”が賀古駅家のキャッチフレーズ。平安時代（927年）、駅馬が大路での規定の倍、40疋配置されており全国一だった。明石駅は30疋、須磨駅13疋、葦屋駅12疋。

風土記には「駅家里」が記載される。

長坂寺遺跡（邑美駅家）から古大内（ふるうち・ふるおうち）遺跡まで、ほぼ直線で約8km。この間、2ヶ所（明石市福里・辻ケ内）で山陽道の痕跡が発掘されている。福里地点の西では溜池（稗沢池）の中に土手道が残り、山陽道の痕跡とされる。JR土山駅前商店街にも山陽道の名残の路地（大字界になる）が東西に延びる。

賀古駅家跡は、JR東加古川駅と加古川駅の間くらい。車ならば、国道2号線で「教信寺」の表示でまず教信寺に寄り（駐車場有）、後は歩いてすぐ東の野口廃寺（野口神社境内）、そして賀古駅家跡（大歳神社周辺）へ。JRの2駅にはレンタサイクルあり、好便。

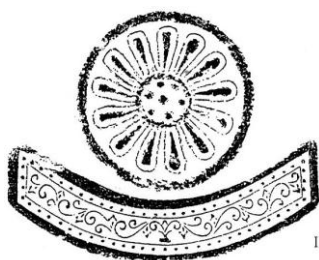
沙弥教信所縁の古刹・教信寺から南へ国道2号線を渡り、馬ヶ池（うまやがいけ）の傍を歩くと大歳神社（賀古駅家跡）。

「古大内式軒瓦」→

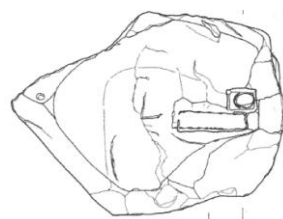


野口廃寺

↑賀古駅家周辺図



長方形の馬ヶ池の南辺土手が山陽道の想定ライン。野口廃寺とは印南台地西端の解析谷を通過する山陽道を挟んで向かいあって立地する格好。山陽道から左右に見える。



唐居敷↑

大歳神社境内には礎石が散在するが、門礎石である唐居敷（からいじき）が残る（小祠に向かって左右。右手（上図）は立っておりすぐ分かるが、左手は分かりにくい）。唐居敷は、平城京や大宰府、古代山城などの格式高い門（八脚門）に使用され、播磨の駅家では2次野磨駅家（落地飯坂遺跡）に続いて2例目。古代山城である城山（きのやま）城（たつの市）には巨大な唐居敷が残る。

兵庫県立考古博物館の発掘調査により、

- i) 駅館院の東辺を限る築地塀の側溝
- ii) 駅館院東側の入口と、北東側を斜めに通過する山陽道をつなぐ進入路
- iii) 山陽道の南側溝の確認
- iv) 築造時の整地・地盤改良工事（地業）跡
- v) 駅家廃絶後の掘立柱建物を検出

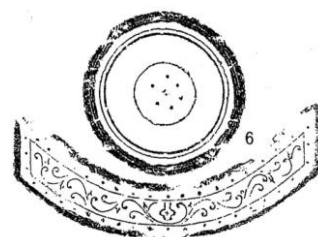
など大きな成果が得られたが、調査対象地が駅家東側に該当する畑地に限定され、駅館院の施設、駅家全域の状況、駅家を維持した駅戸（えきこ）の集落などについては今後の課題であるとされる。

ところで、調査された駅館院の方位が正方位ではなく西に傾いているのが不可解。

瓦葺駅館院の築造時期は、出土土器から8世紀中頃～後半と推定され、平安時代～鎌倉時代に廃絶したようである。

■佐突（さつち）駅家（北宿遺跡）

賀古駅家から佐突駅家へは加古川を渡り、山陽道を西北へ約9km余りで、北宿（きたしゆく）遺跡。



「北宿式軒瓦」

JR山陽線曾根駅から国道2号線を北西へ500m位。遺跡の面影は地表では探せない。現在の佐土集落は北宿遺跡から約1km北西。

佐突駅家は『延喜式』（927年）に記載されない廃止駅であるが、『続日本後紀』承和六年（839）条には、「印南郡佐突駅家、旧に抛り建立」とある。いったん廃止されたが復活し、また廃止されている。行政改革の目玉だった？

駅家跡の比定地は、古大内式や北宿式軒瓦など

いわゆる「播磨国府系瓦」が出土する北宿遺跡とされる。姫路市教育委員会により周辺も含め調査が継続しており、瓦は少し出土するが駅家・山陽道の遺構は確認されていない。

駅家推定地の北東側の小字名は「馬ヶ谷」。駅家に関連しそうな地名だが、法隆寺の所領（印南郡・飾磨郡）に「左豆知乃乎利（さつちのおり）」があり、乎利は「檻・牧」との指摘があり、牧に由来する地名かもしれない。



古代伝路（明石・賀古・印南）と古代寺院

「駅路」と「伝路」は、ハイウェイと在来道に比較されることが多い。駅路は地形以外には地域の事情を無視した直線道で、日常生活には使い勝手悪い。山陽道（駅路）は上図のように、明石川西岸から加古川を渡り、法華山谷川東岸まで約20km、ほぼ直線道が続き、ここで向きを変え再び、佐突駅家まで直線道が続く。

律令国家の足腰は郡・郡家が支えており、郡家は地域の核であった。その郡家と郡家を結ぶ道が存在し、伝路（でんろ）と呼称される。

古代寺院は、駅路と同じく律令国家・律令体制の舞台装置のひとつであり、地域の核となる郡家・伝路の近辺に建立されることが多い。

加古川東岸の伝路

曇川 → 舟引原 → 瀬田川 → 林潮

風土記・賀古郡鴨波里の「舟引原（上図）」の地名伝承に、「印南大津江から川頭（かわかみ）に上り、賀意理多（かおりた）の谷より引き出でて、赤

石郡の林潮（はやしのみなと）に舟を通わせた」という一節がある。印南大津江（不詳）から上流へ上り、日岡山の北麓に流入する曇川（くもりかわ）の形成した河谷平地（賀意理多の谷）から緩やかな分水界を越え、瀬戸川を下って林潮へのルートが比定されており、東進すれば邑美駅家に至る。

伝路沿いの古代寺院 — 石守廃寺・西条廃寺

曇川の西岸に石守（いしもり）廃寺、東岸には西条廃寺が立地し、寺院を建立できる有力な氏族集団（豪族）が蟠踞していたことが推測される。山陽道が新設されるまでは、曇川流域が交通の要衝地として重要な地域であったのであろう。

駅路（山陽道）の開設に伴い、駅路沿いに野口廃寺、賀古郡家推定地の溝之口遺跡・美乃利遺跡や、駅戸集落とされる坂元遺跡などが形成されたのではないだろうか。

石守廃寺 — 大部造主導か

前号（262号）で紹介したように、渡来系寺院のひとつの指標とされる「瓦積基壇」は、播磨では加古川の中下流域に集中している。

なかでも石守廃寺では、**輻**

線文縁（ふくせんもんえん）軒丸瓦（上図 外縁の短い縦線文様）や**ジグザグ縄叩き平瓦**など、渡来系寺院の指標が重っており、渡来系氏族が主導した古代寺院である可能性がきわめて高い。

風土記・賀古郡鴨波里には、加耶系の大部造（おおとものみやつこ）等による開拓が記されており、寺院建立を主導した可能性が高いと考えられる。



加古川西岸の伝路 — 中西廃寺

川幅も狭くなり比較的安全的な渡河地点から、西岸の台地に沿って緩やかに湾曲する古道は、かつて古代山陽道ではないか、とも推測されていた。

この台地上の集落内に中西廃寺が建つ。発掘調査はされておらず詳細は不明であるが、小さな薬師堂の境内に大きな塔心礎（2.2×1.85m）が残る。台地裾の古道脇には「石井の清水」が保存され、湧水口に中西廃寺のものと推定される「石製露盤（ろばん）」と「刹（さつ）」が使われている。

「山田寺亜式」と呼称される特異な軒丸瓦、顎部施文軒平瓦が出土しており、中西廃寺の造寺集団は山陰道を介して秦氏系集団ともネットワークを持っていたようである。

参考・引用文献

今里幾次・高橋美久二・木下良 1978

『古代山陽道の検討』古代を考える會

岸本道昭 2006『山陽道駅家跡 西日本の古代社会を支えた道と駅』同成社

資料集 2013『古代の駅伝馬制研究の現状と課題』

第24回中四国古代史研究会・兵庫県立考古博物館

資料集 2014『播磨国の駅家を探る』

第15回播磨考古学研究集会実行委員会

資料集 2013『明石の古代』

発掘された明石の歴史展実行委員会

稲原昭嘉「太寺廃寺と古代山陽道・駅家」同 上

寺岡洋 2012「芦屋川周辺を歩く」「苅藻川流域から須磨」『ひょうごの古代朝鮮文化』むくげの会

寺岡洋 2013「加古川流域（東播磨地域）の「山田寺亜式」軒丸瓦と顎部施文軒平瓦」

『むくげ通信』259 むくげの会

吉本昌弘 1990

「播磨国邑美・佐突駅家間の山陽道古代バイパス」

『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』

木本雅康 2013「明石・賀古・印南郡の古代伝路」

『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅱ』

兵庫県立考古博物館

菱田哲郎 2002「秦氏の寺とそのネットワーク」

『京都と京街道』吉川弘文館

菱田哲郎 2005「山背の山田寺式軒瓦」

『古代瓦研究Ⅱ』奈文研古代瓦研究会